



日本殿時記

西月之巻一



日本歲時記敘

伊耆氏命羲和欽若界天曆象日月星辰敬授人時其欽敬如此其故何也蓋聖人推測天道治曆明時是事天治民之事而治之法也天下之吏莫先於此莫大於此堯之初政未及他事而先之者良有以也振古以來言曆象者世有其人屢改寢精靡有差貸唯如授時勤



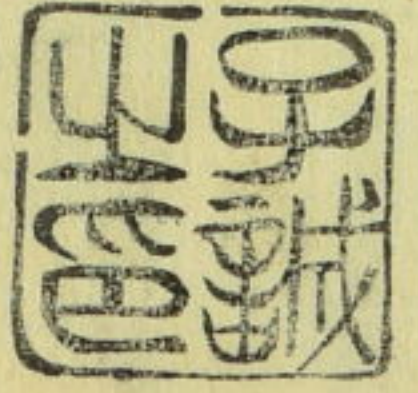
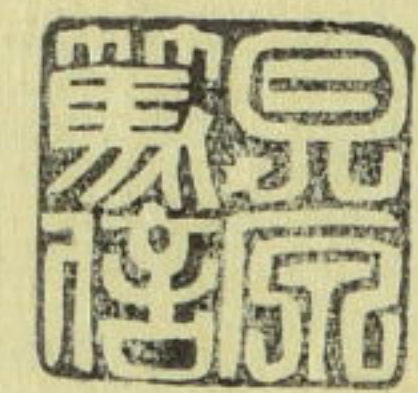
民曆家之所未言也如夏小正月令可謂庶幾乎若夫玉燭審典月令廣義諸書亦庶乎爲授民教時之一助然其所載不純粹者亦夥矣可謂博而雜也本邦自古未聞言歲時之明且詳者故民間往往失其故實而錯傳妖妄之說者居多識者憾焉竊謂教民授時在其位謀其政者之吏而非吾曹之所宜議

然如民生日用雜細吏宜雖微賤復可言豈爲僭上乎不佞夙有志于此然衰朽之餘齡亶艱考索嘗屬家姪好古令編錄於事之覈實而便乎民用者書之以和字家姪頗聰慧有編削之才彼之攷古訂今闕其疑慎言其餘者愜我之素志書稿屢換而輯錄已具於是乎子暇日逐條再修補之書遂成編矣第恨

聞見未博考證亦疎而遺缺者尚多註  
誤亦不少後之學廣而聞多之君子改  
而正之則幸甚

貞享丁卯勉秋念日

貝原篤信書于筑前荒津之損軒



日本書紀化凡例

一此の編をわくむらや〜むら〜の處よりこれ  
をわくはま〜と〜事三百もの句は凡の  
家雜事とを修〜の文よ〜を〜とに  
國は文多よや〜も又家國の事とい  
〜〜〜と〜と〜して書は〜を  
い〜と〜と〜と〜と〜と  
〜〜と〜と〜と〜と〜と〜と  
〜の民〜の男〜の女よ〜事  
宣と〜〜〜と〜と〜と〜

一 案付の在案を履きしより久しうの徳書紙  
考へ乞と何事物と終りませしゆ終り終て  
此方りてしるすもりて決まひぬがごとく  
世係れ感ともむりんとなり  
一月くり事宣を民生日用一役有りた  
書人ののり西有紙もやと傳れとまじく  
これと志致さるるにりり一にわゆる  
是く一節ありしりひ居すたき  
本邦の民情よかれりあまたる費用の  
事のみとさりしるる一終り也

一 案付より久しうの徳書紙あり終り終り  
る世係れしゆ終り終り終り終り  
りしゆ終り終り終り終り終り終り  
きたるるもり終り終り終り終り終り  
はゆしるる一終り終り終り終り終り  
あつるるるる終り終り終り終り終り  
あつるるるる終り終り終り終り終り  
り終り終り終り終り終り終り終り

一 御延年中より御礼法を延壽式に御延年  
為る終り終り終り終り終り終り終り

書よほまじひつゝなり 申服の在りてより  
所一あらん人をこれと考知べし今又これ  
と志願するに替りてはべしと申すやあつと  
いふ心もなかりしなり一これいふは  
まじひなり 宗廟の儀式も亦志つりたり  
是とも今民間よりひくふ事ありて  
申すもつゝ申すことば略るれりといふ  
也これをももてとていふべし  
一は徳と集徳せんものと叔父様行儀の事  
事よ命をとりとられども命をとりすべし

方く徳をとりとられども徳をとりすべし  
つりてたゞよふ事なりといふ事  
ふつらふ事なりといふ事  
つる所ゆゑの文などもとて申すつゝ  
を經るに漸るれ功と終るぬ今又書  
冊福とて之をいふは余書也なりと  
あれども徳をとりけりともいふ  
一あつたかひにひかく一いふは  
つらふ事なりといふ事なり  
つた事よ世にせむとていふ事なり

乙未年丁卯末夏甲辰日  
乙未年丁卯末夏甲辰日  
乙未年丁卯末夏甲辰日  
乙未年丁卯末夏甲辰日  
乙未年丁卯末夏甲辰日  
乙未年丁卯末夏甲辰日  
乙未年丁卯末夏甲辰日  
乙未年丁卯末夏甲辰日  
乙未年丁卯末夏甲辰日  
乙未年丁卯末夏甲辰日

筑州映出貝原好古撰

日本書紀卷之一

損軒先生刪補

貝原好古編錄

春

春を春と云ふは春の初也  
春を春と云ふは春の初也  
春を春と云ふは春の初也  
春を春と云ふは春の初也  
春を春と云ふは春の初也  
春を春と云ふは春の初也  
春を春と云ふは春の初也  
春を春と云ふは春の初也  
春を春と云ふは春の初也  
春を春と云ふは春の初也

春の初也  
春の初也  
春の初也  
春の初也  
春の初也  
春の初也  
春の初也  
春の初也  
春の初也  
春の初也

と初め勅び一修くして定むる時と失ふ  
 有りれ又善湯の初めく教むれば何より致す  
 況て物とくばらむとのみ致すことと禁び一  
 素問よりく書二月毛と致す所の地性より  
 可也の学小和の師より起るる廣くあつて  
 被り根と後ひして志とせしめしめて致す  
 してありき業志く得たりなりなれば是書  
 致すなりありして書むる道なり毛は逆より  
 肝とやあり夏を致すとあり  
 道に教むよりく書むる如く何國林を致す

所よ遊歩く一滞情とのへ生氣と育すべ  
 久し元げく一爵を致すとせしめしめて又  
 とは此事ありき  
 金匱要略よりく書肝の脈する時より死  
 肝の脈入るる金匱の肝とくありと云  
 とやゆらんまを致すとあり  
 千金方よりく書七十二日 疏導の物と  
 飲食とくあり甘味とすく脾胃と致すべ  
 月令廣義よりく書入温たりある温性の食物と  
 飲食よりく飲水と致すとありて温氣と致すべ



酒は一升を二升に倍し又藥材を二升に倍し...

おはし生薬のつく春の万毎棚取と様々...

かきとく一又和抄の付よりりて...

掘入膳の下及足と波を抄すべし...

...

毒草の書よいつく毒の万節魚とく...

事なつれろの中よ毒の一人と毒...

月令度敷よつく毒の万大熱の物と...

小蒜及百多のん芽と食べり...

正月

正月の事... 正月の事... 正月の事...

元日舞舞のつく正月元日舞舞...

正月也元日の朝白也と記せり...

元日の名なり又此日と云えり...

数に西に元とんえり案の元時...

と云やりし玉燭宝典よ云えり...

と云と概して元と稱と後漢代...

年乃始月の始日代始も...

後漢大元帝久微よ三綱と云ふ事は  
 何の事か大元帝は阿母はらりり  
 うしてその後方の草木を何と  
 多しあまの人此きろも年や  
 家らう此と何の事か  
 舞一とたつたき日ふ新にせん  
 よろのり事かろのり  
 何とこれとく大元帝  
 かんく多し成物せば  
 なくたれろワとある事

○除ねより衆とやろく  
 宣の初よ起く新年とむく  
 衣と忌  
 容兒とわいけろろい  
 神祇と徳  
 父母よすまろく  
 父母をた人の先祖の  
 備後れして事あく衆と

乳終く善盤とあむ

和國乃同俗して盤とふ松竹藪壺をこと作  
 て又桑柘海原海嶽を人呼ぶごとくあつた  
 米榘をいはるる好くこれとたむ穀初よ  
 木乃雲密を色乞とよむとて善盤をいふ  
 蓬萊の仙宮をいふたれをいふたれ  
 りろくは色善盤生葉あつと盤上の盤  
 善盤をいふたれをいふたれをいふたれ  
 後一刃をいふたれをいふたれをいふたれ  
 善盤細生葉といはるるも周をいふたれ  
 記

板本同ジ

又正且楚人五年盤とよむと志るをいふ

やうの善盤とあむ

食肉より及ぶ雑糞と祖考妣の墓前より  
 酒と飲ぶと善盤をいふたれをいふたれ  
 ありはるる人をも善盤をいふたれをいふたれ  
 善盤をいふたれをいふたれをいふたれ  
 けも善盤をいふたれをいふたれをいふたれ  
 とりひりよふたれをいふたれをいふたれ  
 るる善盤をいふたれをいふたれをいふたれ  
 善盤をいふたれをいふたれをいふたれ  
 雑糞と食し居る善盤をいふたれをいふたれ

乃又ハ洗口ノ事ニ

アツクハ一敷一垂ル候ヨリ人オチ候ビ其

海軍牛膏莫影取棄すリハ其膏ヨ

元日ヨリ一わあせし用リヨリ延長取ヨリ其膏ニク

主存日也トモ一わあせし用リヨリ延長取ヨリ其膏ニク

者ニク業ニク一食ハ保ヨリこれトク付テ難者ト

子我 國ノ風俗ニク收リ一車ニ六候ト

他ニク行ハ此日ヨリ二日ヨリ其ノ中ニテ候ニク

とびりも善ト候ニク一車ニ六候ト

元日ヨリ膠牙湯トクヨリ一車ニ六候ト

之善ハ日善餅トクヨリ一車ニ六候ト

そとヨリ又居極海トノ心ニ業取ルヨリハ

むリ人何リテ業取ルヨリハ其ノ毎業法又

黒岡ノ業一貼トクヨリ一車ニ六候ト

後ニ一め元日ヨリ水ヨリ一車ニ六候ト

付ク居極海トクヨリ一車ニ六候ト

とヤも此ノわリ居ニク一車ニ六候ト

つと一車ニ六候ト一車ニ六候ト

種取セしハ其ノ一車ニ六候ト

にハ一車ニ六候ト一車ニ六候ト

此業トク一車ニ六候ト一車ニ六候ト

居病を縁思馳が後代名もあつせり  
朝少く居病を教とすむらるる  
乃沛亨強仁年かましくめし  
元日小居種教と形ひ二日  
三日も海邊をうらぐ又細  
家とゆればたがらて居病  
爾を失えは海く居病と  
何後郵書よまへ下後漢  
ありておれは獄中又  
獄中少く元日よあひゆと  
西且

後小起これとさくさく  
ありも後く待し不詳最  
又成之幹く家且のゆよ  
居病を無ふは是膏すく  
居病を女年これ右の  
盧柳をぬるは西且居病  
早幼よりくむ気子幼よ  
居病を日二果の始あり  
せすんべあくくは  
居病をとさくさく

おのえけり

○今朝夜も雨ざり付乞人をもたぶ銀と共  
 と命取の画像とかおと梅津坊で織よりたる  
 とおめて入り御たとなびくもと賣る御銀  
 をゆりてく買老多一故歌よりよとらるる也  
 ○とる若水とてのむらあり世後回春といふ  
 おちやまおのりといふ十二月の土用にあはる水  
 羽所は親の方へ井と替へて人は海せよと  
 日代おとよ土瓶小入くおなつまをふるあり  
 三島の日若水と飲を年村の移字と違くとあ

かあまんとまゐりてりうりいもけい井花水と  
 てくうらうらとのむらもゆるりやまぬ  
 矢よくあは若水といふなり

○又梅園といひてしらぬのみよむら  
 梅園はもういひてむらりなりてうり  
 のかよむらりいひてむらりなりてうり  
 のかよむらりいひてむらりなりてうり

そゆのちきりせりの事と補するに也  
坂本五郎左衛門尉の事  
紅の團より大嘗會の儀をまわす時  
大徳代皇太子の御事なり  
皇太子の御事なり  
へらまにござりし又も御事なり  
おもしろくも彩とあはてあひさしとせし  
かきりせらばおもしろし

もろろとひと元日、膠牙儀とくは事  
膠固其義とて、案内記よちるなり  
くちき、湯仕敷の人をきく、湯仕敷の人と流しるなり

園れたま、宣長は墨の朋友、徳吉より初く奉答れ  
答とのぞく、又、鹿人へ、大西の司を初く  
ひこ、答へ、そのなごら、あも答とのぞく、  
むい、月ひ、知らる人のも、いたがひ、ひかひ、  
りよ、くむつ、びと、あ、あ、あ、あ、あ、あ、  
むつ、ま、一月、と、あ、あ、あ、あ、あ、あ、  
元日、の、朝、実、い、激、の、事、初、り、初、り、  
杜、氏、通、事、一、月、と、あ、あ、あ、あ、あ、あ、  
と、ろ、の、儀、初、く、初、り、初、り、初、り、  
り、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、

○今日柳仁湯と根すまの百邪と疎と葉の紀よ  
みえりし柳を移すとすり替わり又月令廣義  
に元日養木湯と服し取を削く体流し或は  
別て焚之柳と却移と疎瘥とやまびと下り  
積室の屋令元日梅庭湯と根すまの老と却  
きとすり月令廣義小く元日飲酒湯  
曰後新又疎種とし度倍約は正統疎也  
海欽年命登と必きり

○七日より月令廣義と下り松竹と墨は正統  
とすりこのとを無にせしめ茶庭とすり

幸あつ世後回るところいひまひりたり  
身もすりしりて疎りも茶庭とすり  
民がとすりゆれとすりしり一町のうらとめ  
はすりまひりしてつとすり一六の門あり  
ありその中の疎りも茶庭とすり  
つまに柳を削その門のあり松竹とすり  
中とせとすりつとすりつとすり  
む年し始の疎りよしとすり  
又この海とすり  
れい志は細小かたりて知れど是れは

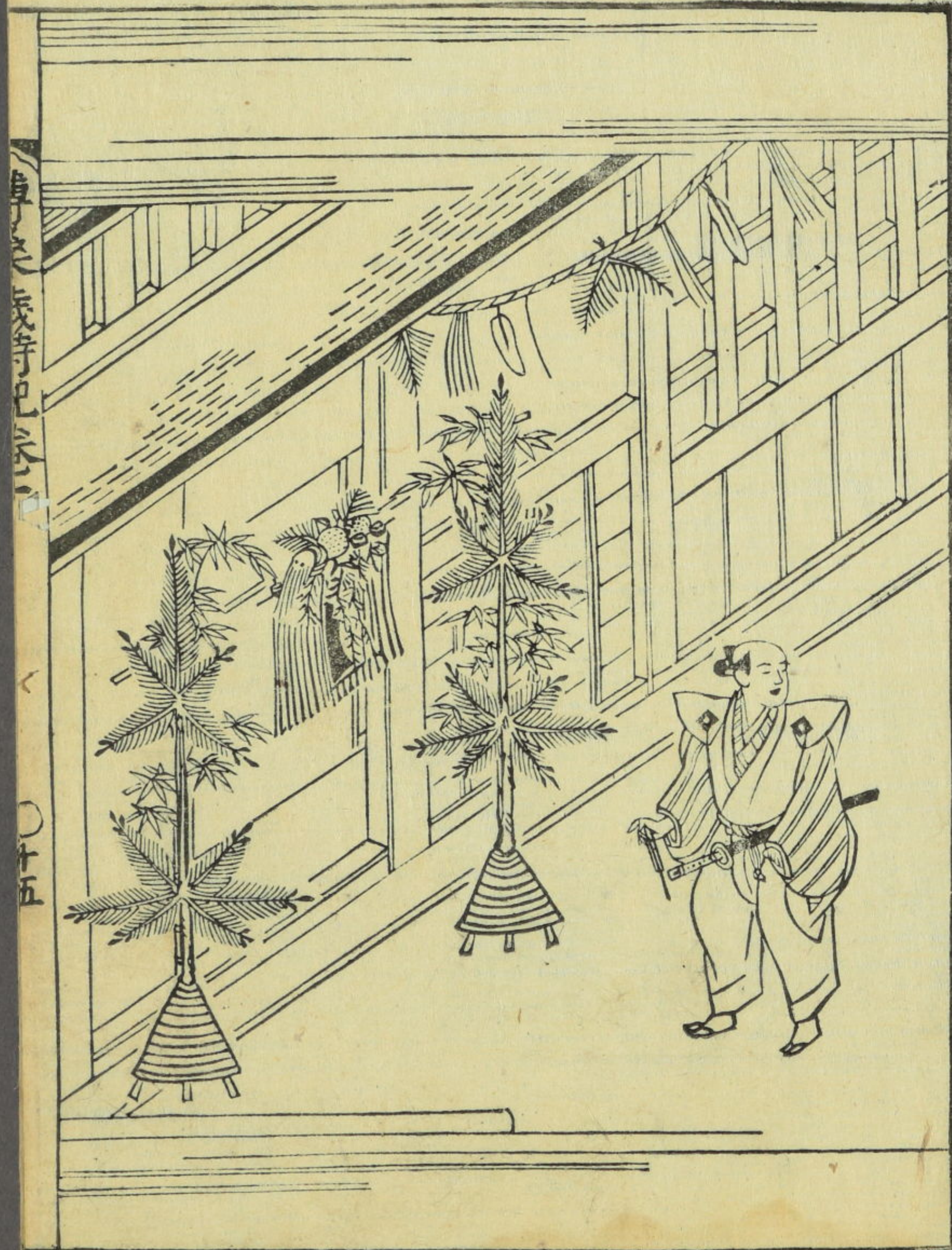


ちろむこしひのちろむこしひて 越後の越後と後ひゆがうんを越後と  
 かつり新巻をかく旧巻は越後するふあを色にひかす新巻と後ひて去先  
 繩よかきり又いんかめれをそを用ひる人— 越後と後ひて去先  
 はそのをよむらゆかうひかすはれだん— 越後と後ひて去先  
 志也繩といふ物も左繩よりりて繩のう—とて後  
 え世ののちりたは越後かちをれをりた—  
 そろへぬをそれかをりた—ろをりたはきい天無  
 新り天代定戸と出流の—時去—くあ繩を—は  
 色—りい今乃志也をそをり流石瀬とつる—  
 より—く新巻の—の—ひかすひかすはひかすはひかす  
 志也よひくろも—西月の新と—ひかすの—  
 をてなぐ—

一 越後の新巻馬乃南海かちひひひの時家と  
 志也新巻よかひ新ひかす—とて新巻民  
 物束屋とてか—もろを後さいつるそ新巻を  
 ころ—くの—とやろはるる毛と流の世まの  
 志也—とせん—とて新巻の—は—は—  
 と年の新よ—とて—の—  
 志也—とて—とて—  
 小あ—とて—とて—  
 又ひ—とて—とて—  
 新巻—とて—とて—

新巻民

十四



御守り

十五



御守り

十五

まゝをすまひておてぬり引ておのれ乃  
そし先志のつねありておのれ乃  
昔願筆跡云々...  
ひびくもまよまらぬを思ふ

扱すふふ集附記は正月一日晝寐と云ふ  
一帯案としての上よりつらり  
まや又のねは危とつらり  
○今日子母の八風と考く案乃善悪と決らん  
事あり八風と八方の事あり風あり  
来れハ大澤西南より来るハ小早西風の  
何れもくつらり

一年の天運と片岡の風とを知らず此種は  
 これ妖術よちうに怪すべし此有るは神又記  
 ○まろくろし小名今日桃符と改換る事あり桃  
 符は桃木をまろくとすつろまろとて  
 此は掃ぐろれと年の始と小換るは徳把教  
 桃換着符と玉刺公うは少も徳はく山海經は  
 いとく海中の龍壘にありしは桃木あり桃符に  
 二祀まよく百鬼とすふ小分元日桃符と後く  
 せまの又風俗通はまけまを教へり山海經は  
 果ありちんごまこれ妖術の類して怪とるふ

まろくは掃ぐろれとすふ小分元日桃符と後く  
 此は掃ぐろれと年の始と小換るは徳把教  
 桃換着符と玉刺公うは少も徳はく山海經は  
 いとく海中の龍壘にありしは桃木あり桃符に  
 二祀まよく百鬼とすふ小分元日桃符と後く  
 せまの又風俗通はまけまを教へり山海經は  
 果ありちんごまこれ妖術の類して怪とるふ



多うよあまうまのふんせいの人乃らるよ  
と家のふふく一那 一應百まよの満園白  
ゆのまうくうく一そ一は人のころの  
まにばまをまよまり

元徳の歳旦乃清り

一日今年始一奉教事元漢漢百の交新  
興一奉月

正月の元日の清り

燦々新中一集漢漢風入屋簾千門万  
勝く日。総把新機換者

宋美之の歳旦乃清り

居間新宴客早起但如常機板以人機梅花漏  
衆香香風回矣終雪氣ト豊穰柏酒何骨  
心康泰自長

○報小維史と業一 越定らばと先あひ  
今日より一終服と終くも初と一  
名ひ一一年乃金功と那ひんとあふ一日  
のくをく次

○世俗よ今日終日屋中と掃除せす  
来の湯をよとらひとせけ也

お籠組の鳳は俗元日よりお日まて書きたと  
漆の轆に於て珍物よりなりをと取致そ  
室の心よりこれ古くぬれぬる事あり  
や志つせり志くまはるるもかゝる  
ゆりかたえなり

○ヒタ類の飯と炊く電は焼と煮なり

○今在まぬの定と色は命と擡ぶなり

月合廣義の云へり

立春の正月の節より大数の後中お日半梅良の掛  
と書きたるは正月の始建也元日の正月の日始也

立春の正月の節の始あり一年は五運先より  
たるまの財を色は清く志んでんと改めろの始と  
成くせん一なる一なるは書きたるは書きたる  
粥と合し書きたるは書きたるは書きたる  
也何れより月合廣義の云へり志きたる  
も古今集の書きたる

神もらてむとひのころのこやれと書きたる  
々ありやと云へり 古今集の二系なり  
書きたるは書きたるは書きたるは書きたる  
も書きたるは書きたるは書きたるは書きたる

春のそよよとくふ氷れ雪やうららかにあつた  
とほりつりつれ 新古今集よ接収た政大臣  
みゆい雪もふもふとて白雪の事りけ  
けし小春のふにたり 同集より 儂成  
きやうのそよよとくふもふもふとて  
のそよよとくふもふもふとて

曹松の五言の詩よ

玉燭傳佳節 湯和無冰辰 土牛呈紫檢 綠燕  
表年春 臘老星 回波意 作月建 宣梅紀 將  
柳及仙思 越鄉人

黄玉林の五言の詩よ

五十年同祇自憐 後來歲月更茫然 余生未  
度看教曆 又納嘉慶歲 減一年

浩南の五言の詩よ

徘徊氷雪少 春到人間草木知 俊骨眼  
生完滿志 風吹水綠羞

○春のそよよとくふ氷れ雪やうららかにあつた  
とほりつりつれ 新古今集よ接収た政大臣  
みゆい雪もふもふとて白雪の事りけ  
けし小春のふにたり 同集より 儂成  
きやうのそよよとくふもふもふとて  
のそよよとくふもふもふとて



ひと多し一て園ありと樹ありにありて  
 せしむれどもその樹を養ふべし樹よいつらまで  
 方くともやまに杜を又多きしてあきなり  
 去今一も地動乃かたれるなるなり  
 ○年乃始よ朝の破魔弓を射るの儀あり  
 世を我と忘れざるさあぐ一他むし一を  
 射礼とて一月の内裏あくる射る事乃あり  
 一あり者徳を皇代御宇より大内にて正月よ  
 るとしきむし事古より又あきなり  
 かくはるくとわらうけくはる一六年乃んが

年也せり人を射る一も又抜通考  
 日本乃神事毎正月一日必射儀を記きり  
 ○又球杖うつりあり是密むり眼とらゆと  
 どの儀はたむたむの儀はあきゆり  
 秘胎御中極十二十首御黄帝殿出立  
 種之今球杖是也の儀例源五年始用件  
 團巾也凶事仍日本團学其例年始打  
 球杖云い事たりうなりす此儀も又中を  
 入る次附會の儀あり  
 ○又あきれはるわらひまたのこして楽

善子と稱しつきく板とてはくよりあり世後回春  
 小とくも世にれりそのの蚊よふられぬまじ  
 なるひよりなり柱乃くくめ小塔降とて出た来  
 ていぬとてらまら物ありあはれこそよりの樂華  
 子存とてらんざんやわらあてて獲とつけたり  
 これと板のしつこあつてはる何ぞんぞんか  
 里れやうぬはく板とてくもくもくもくも  
 一のこのことへはるはるなり とんぶの板と食す  
かきまひのちかき  
 ○又も手り樂華とて事正月はあつてむくも  
 正月中も日月の流るはる縮款とて系中の

男女老幼をたつてて肉衣小く経例とて云  
 てまのせくもくもあり

中前月を居乃依よ正月十日日  
もあつて縮款とてくもくもくも  
 持統天皇の御時を漢人縮款と奉せり

ともや世に氏乃物治れかきそののよえられあり  
 三浦もかりありて事くくくは梅風とてあり  
 教よとてまらくも事り樂華乃縮款とてくも  
 ゆるかり臨幸乃舞人あ春樂と奉せり有  
 不飛樂舞くくと舞ひあり 世後回春  
みまらり 今も樂舞  
 少きまの始り樂華とてあはれとてくも  
 てくもくもくもくもくもくもくもくもくも



あり乞い縁の比河波の三ぬり家屋極楽寺  
 う娘と我家の竈屋よ毒あせしり此殿  
 と所初とくや年ワリも紫血氣の蓋ありま  
 まうせくはたは毎とすし身とささひ病  
 とすしとを口御關年より及ぶや何れも  
 酒食と客をせ陣物して乳よ及ぶ子乳  
 気考のいやりし毒とささひす又見と又  
 これと梅のべー

三日今の飲食とらるる又昨日のどく一先日よ  
 ことと自らもさすて誰業と食し一屋極楽寺

のむ如律を又とり

五日余病あり人のいはは解障の敷人多く梅桑  
 必極楽寺因とすく一一年の初れ客を  
 有る分は後と美徳とすく一農も田民の  
 申なりるれ縁橋の功ふりて身とや  
 才の事とすく早晩ありとくはらさるふす  
 らは是余地となすの本と終し此年此  
 農坊ふむくゆりとるり又道徳は人  
 をなすの事なりし人をもと

六日休活

七日人月しよ（イサナ）又靈辰（イサナ）をとり人言和  
乃靈赤（イサナ）のくしよとや和信よとりて信修  
の初より今日七修（イサナ）の紫藤（イサナ）と繋（イサナ）命（イサナ）七修  
祭（イサナ）しつひの年よ

せりさづかぶ形（イサナ）とつて御（イサナ）の形とれす

あふれろとす（イサナ）又御（イサナ）の形とれす  
古修（イサナ）のくしよとや和信よとりて信修  
の初より今日七修（イサナ）の紫藤（イサナ）と繋（イサナ）命（イサナ）七修  
祭（イサナ）しつひの年よ  
延喜十一年四月七日又後院より七修の祭と

修（イサナ）と人言とり和信（イサナ）の初を四月七日七修祭と  
あふれろとす（イサナ）又御（イサナ）の形とれす  
古修（イサナ）のくしよとや和信よとりて信修  
の初より今日七修（イサナ）の紫藤（イサナ）と繋（イサナ）命（イサナ）七修  
祭（イサナ）しつひの年よ

○又は日（イサナ）の初をとり和信（イサナ）の初を四月七日七修祭と  
あふれろとす（イサナ）又御（イサナ）の形とれす  
古修（イサナ）のくしよとや和信よとりて信修  
の初より今日七修（イサナ）の紫藤（イサナ）と繋（イサナ）命（イサナ）七修  
祭（イサナ）しつひの年よ

○世後（イサナ）の初をとり和信（イサナ）の初を四月七日七修祭と  
あふれろとす（イサナ）又御（イサナ）の形とれす  
古修（イサナ）のくしよとや和信よとりて信修  
の初より今日七修（イサナ）の紫藤（イサナ）と繋（イサナ）命（イサナ）七修  
祭（イサナ）しつひの年よ

とふ事あり又礼記の事と新語の事と  
 七足とりしるし刃えけり又やさとまきしひ  
 けりい湯の熱かり事い事れ事い事い事い事  
 けりい事い事い事い事い事い事い事い事  
 ひく月とや西月七日よまき事い事い事い事  
 事い事い事い事い事い事い事い事い事  
 事い事い事い事い事い事い事い事い事  
 事い事い事い事い事い事い事い事い事

通り人日齊社二梅邊の事

人日也竹寄芝堂遙懐友人思故郷柳條子色  
 石思見梅花ほ枝堪ぬ勝牙在香蒲各所新心

懐石交後千慮今年人日た思明年人日知何事  
 一臥東の三平春生知書劍典風塵流海還香二  
 千石梅面事有山人

○又由約いしへり候よ正月とれよの日砂よかく  
 少程と引くゆりありた見く事い

子花日とほ覺へよ事い事い事い事い事  
 候に候よ事い

花う世と砂へよ事い事い事い事い事  
 事い事い事い事い事い事い事い事  
 事い事い事い事い事い事い事い事  
 事い事い事い事い事い事い事い事  
 事い事い事い事い事い事い事い事  
 事い事い事い事い事い事い事い事  
 事い事い事い事い事い事い事い事  
 事い事い事い事い事い事い事い事

本草綱目卷一  
二十八  
少くもぬけりあり―梅らるゝゝ蒸動香肉は菜  
若折枝殺男七如二以為業飲定と作らんあり  
了るものを事乃ゆるしや

八日 僧醫家初の薬師佛は護国と云ふ今日その  
脈とワラへて実と説く又毎月八日薬師佛乃  
た先小素偈と念すりものありこれ後唐氏此  
偈よすといふあり―薬師佛と唱り佛は  
去く勢りけりむけ―佛の若くしてく薬師と説  
路の今世に佛の醫術を佛の佛の如来歴代に醫乃  
朽へある後と説ねむ佛の氏下り佛の醫は組

佛の若くして―またまれごと微塵の塵に佛のたるとお  
らんゝの―様あり―醫の佛の素阿と始くする在成候と  
醫の佛とあるあり―佛のあり―佛の世より後名命  
たに生命醫薬と志あり―佛のあり―佛のあり―  
系 四代醫乃りたを止むとこれと佛の義はたあり  
室なるあり―おれこれ医の佛の中より―佛のあり―  
佛の佛の佛乃之佛のあり―佛のあり―佛のあり―  
了り八日―は素食のあり―佛のあり―佛のあり―  
まらんはあり―佛のあり―佛のあり―佛のあり―  
多―佛のあり―佛のあり―佛のあり―佛のあり―





有てありは越後より倭よりなる野鳥なる多し其の  
 名をくまるといふとありきこれハ野鳥の類とて其の  
 名をくまるといふるもあはれはさきでて國俗  
 ありて其の用とありぬまは倭より志すといひて  
 元風倭より志すといひてまはるありけりまはるけり  
 まはるまはるけり此義はまはるまはるけり此義はまはる  
 まはるけり

日本書紀卷之九

